

# 牧草と園藝



サイレージ用F<sub>1</sub>とうもろこし

## ニューデントの特性

### 子実収量が多い(高栄養)

組合せ能力が高めてありますから(雑種強勢が強い)子実生産が多く、上手に栽培しますと10a当り晩生種で800kg、中生種700kg、早生種600kg前後の子実生産ができます。(とうもろこし穀実価格トン45,000円参考)雑種強勢に関連して揃性を心配される向きもありますが、ニューデントは揃性も良好で、機械収穫にも最適。

### 茎葉収量が多い

草丈高く、葉も大きい(ガサも多い)同じ生育日数(R.M)でも従来の子実型F<sub>1</sub>よりも茎葉収量が多い。サイレージは子実と茎葉をとともに切込み利用するもの。草丈が高いと倒伏、切損の心配がありますが、ニューデントは根張りよく、茎も太くこの点も改良されています。

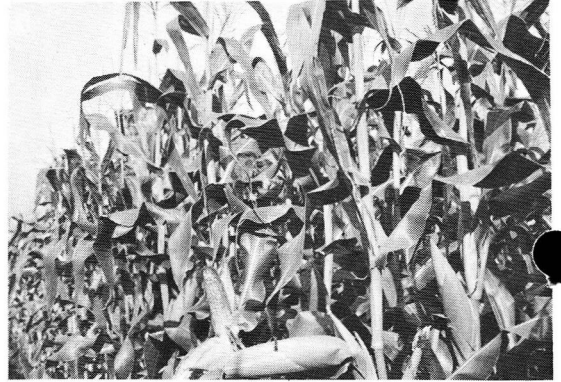
### 耐病性に富む

収量特に子実生産に大きく影響するゴマ葉枯病、スモモン病に極めて強く、これが本来特性の子実、茎葉生産を高めてくれます。最近はどうもろこしの作付頻度が高まり、時には連作を余儀なくされることもあります。この時こそ耐病性品種の選定利用が肝要です。

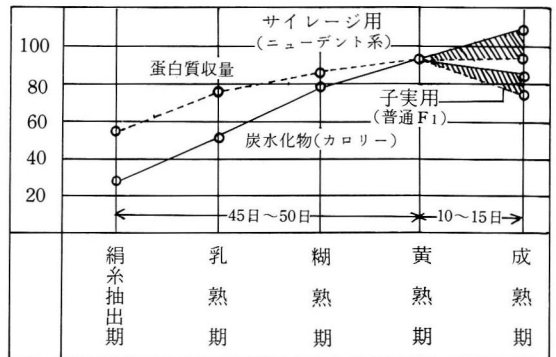
### 収穫適期の幅が広い

(霜に強く、緑葉保持長い)

従来の子実型F<sub>1</sub>とうもろこしは、黄熟期が収穫適期で、その後は茎葉枯凋期にはいり、1日毎に収量が下向しますから短期間での収穫が必要でありましたが、ニューデントは黄熟期後も緑葉を保持して同化蓄積を継続し、10日間で10~20%もの乾物増加をします。つまり黄熟期後もおけばおくれ、収量が高まる収穫適期幅の広いサイレージ用のとうもろこしで、機械共同利用の廻り番でおこなう適期収穫のトラブル解消に役立ちます。



サイレージ用子実の黄熟期以降の栄養蓄積の差異  
(収穫適期幅広く増収)



いつまでも緑葉保持ではサイレージの水分が多過ぎはしないかの心配が出来ますが、黄熟期以降であればどんなに茎葉が緑でも水分は最適の70~75%です。

### サイレージの良質調製にも有利

近年のサイレージ用とうもろこし栽培は高栄養生産を目標にして早播、晩期収穫が励行されています。特に晩期収穫での子実用F<sub>1</sub>品種用では、黄熟期の茎葉枯凋更に降霜での脱水で水分が著しく不足してこれが原因でヘイレージ(低水分サイレージ)と同様2次発酵やカビの発生がおきておりますが、ニューデントは黄熟期も枯凋なく、霜にも強く緑葉を保持し適水分の上糖分含量も高く良質サイレージの調製が期待できます。